

UIFA JAP●N

NEWSLETTER

■主な内容

喜多方ワークショップ

「煉瓦蔵のある銚色のまちを訪ねて」

連続企画 広がるレースワーク 3

「日本とブラジルの文化のかけらを編み込む2」マリア・アンジェリカ・ダ・シルバ

「ベトナムの古都・フエの生活レポート」 六反田千恵

DOCOMOMO 活動をご存知ですか1

ちよっとお知らせ「ナディアさんコンペに優勝」

ちよっとひとこと「プリーズ・プリーズ」

役員会報告

■喜多方ワークショップ

「煉瓦蔵のある銚色のまちを訪ねて」

9月26日。郡山で新幹線を乗り換え約1時間半強、”やっど”喜多方に着きました。爽やかな秋晴れの中、佐藤久美子さんとお母さん、田中フミ子さんのお出迎え、早速用意されたバスでスタート。銚色の釉薬のかかった煉瓦蔵のある醤油・味噌問屋の若喜商店を訪れます。

伺った若喜商店の蔵は座敷蔵。一階が「縞柿の間」。柱、梁、天井板、調度品に至るすべてのものが縞柿です。二階は「櫓の間」。ここは天井を低く抑え、障子の組子には松葉のデザインを、襖絵は京都の流れを組む絵師が何日も泊まり込みで書いた作品。喜多方ではこのようにして、絵師や左官等の職人や文化を育ててきたのです。会津若松の”官の町”に対して喜多方は”商人の町”、豊かな水、お茶の北限という気候で、塩以外は自給自足できたとのこと、喜多方のおいしい水、それが育む米と酒。大豆からは味噌・醤油、そしてラーメンが生まれたのです。

ご主人が話しの最後に「質問が…」と切り出します。

「この蔵は曳家ができますか？」との問い。ここに計画道路があり、その道路に蔵の一部がかかることからの質問でした。店の横の道は市役所からの幹線道路、若喜商店の前でT字になり、正面にある竹久夢二が愛し、逗留していた旅館も計画道路の真上になります。この話しの後、バスの中の議論はこの計画道路を巡って白熱です。煉瓦蔵の三津谷、漆喰蔵や土蔵の村落・杉山の見学へ向かいながら討論は熱を帯びたままでした。

杉山の村落では、村の一番奥にある漆喰蔵を見せていただきました。そこは溢れかえる調度品に埋もれた続きの間



フランス積みの煉瓦蔵



喜多方市長を囲んでのワークショップ

で、冠婚葬祭の時に使われる座敷蔵でした。私たちが入れていただいた外からの出入口はお坊さんだけが使うものとか、入り口脇の石の金庫にびっくり。隣の仏間との間の土の引き戸と厚い開き戸は、今も何かあると閉め、重い戸が軽く動く様もを見せていただきました。そこには喜多方の文化の歴史がごろごろと転がっていました。

いよいよ喜多方市長との『ワークショップ』、白井英男喜多方市長は昨年4月に市長になった新人で若手、同席されたのは商工会議所の副会頭の冠木(カブキ)啓次さん。白井市長の市の発展への取組みの一つである商店の若手を集めての『あきんど塾』はまだ緒についたばかり。今日聞いた話、見た感動が熱を帯びて質問や提案となって市長へぶつけられます。とても一時間で終わる話しではなく、「継続審議」ということになりました。その夜の漆普請の宿、翌日の事も、共に続きとして……。 (中村陽子)

■連載企画 広がるレースワーク 3

UIFA 国際女性建築家会議第 12 回日本大会のその後

日本とブラジルの文化のかけらを編み込む—2— ブラジル マリア・アンジェリカ・ダ・シルバ



国立アラゴア大学、都市建築学部教授。日本大会では、「ラグーナガーデンの緑化」と題し、環境共生の視点で、ブラジルの漁村の自然素材を使った建築について発表した。

漁村の住宅の木造フレームワーク

このイラストは、ブラジルのバナキュラーな漁村の住宅の木造フレームワークを表わしています。これは日本と同じようにモジュラー・システムによっており、木造フレームが完成したあと、日本の荒壁のように泥を塗り込めて、最期に藁を葺きます。私にはこの土壁が日本のものと同じように見えます。垂直方向の木の柱は単なる支持柱です。日本との違いは、こちらでは竹を使わないことと、下地窓のような窓をほとんどつけないことです。最近まで、家を建ちあげる際、コミュニティ全員が参加して建設の段階ごとに歌を歌っていました。住宅の寸法は人体が基準にされています。

FISHERMAN'S HOUSE

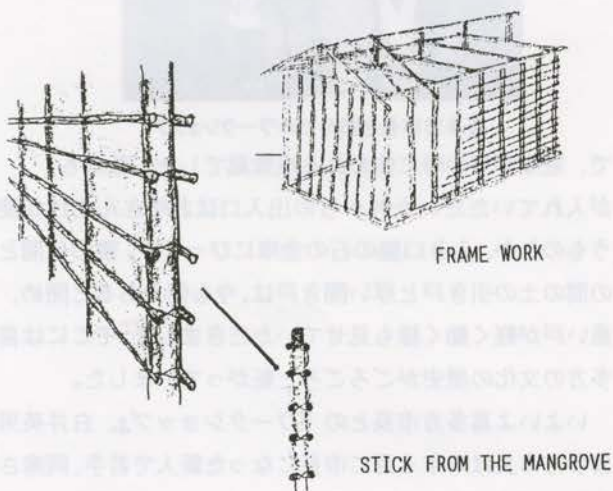


写真1 フレームのみの状態



写真2 バナキュラーな漁村住宅

写真1, 2は、ブラジル北西部、マセイオのサンタ・リタ島にある住宅です。

この構法はブラジル全体の町や村に分布しており、現在では簡単な住宅にのみ使われていますが、過去には複雑な建物にも使われていました。例えば写真3のブラジル南東部にあるOuro Preto市の建物は、ほとんどがこの構法と同様の技術で建てられています。



写真3 Ouro Preto市の建物

(訳 田中厚子)

ベトナムの古都・フエの生活レポート

六反田千恵



1964年京都市生まれ。早稲田大学建築史研究室(中川武教授)卒業後、長谷川逸子・建築計画工房に3年間勤務。現在、共栄学園短期大学居住学科講師。

世界遺産の都市・フエ

8月10日、フエ到着。フエは南北に長いベトナムの中部地域の核となる都市で、その遺跡群が1993年に世界遺産に指定されたことから国際的にも有名になった。ベトナムは北から中国系文化の、南からインド系文化の影響を受けてきたが、中部地域はいわば両者が出会う場所である。ベトナム戦争時代の激戦区でもある。フエは17世紀末から南部地域の首都であり、18世紀末から第2次世界大戦の終結、つまりグエン朝の終焉までベトナムの首都であった。現在、中部地域はベトナムの中でも最も貧しい地域となっているが、フエの遺跡や住宅、人々の生活様式から気質までを含めて、ハノイやホーチミンでは見ることのできないベトナムの一面を教えてくれる。フエ市の中心を流れるフォン河がゆったりと膨らんだその内側に王宮があり、対岸には新市街が広がる。王宮はこの新市街の向こうにある御屏山に面して建設されている。王宮からフォン河を遡っていくと上流から、順に初代皇帝ジャーロン帝(フエではヤロンと発音される)以下、歴代皇帝の帝陵が点在している。

19世紀からフランスの侵略を受け続け、1945年にベトナム民主共和国として独立してからも、インドシナ戦争、ベトナム戦争を経てようやく1975年にベトナム社会主義共和国として南北統一を達成と、激動の近現代史を辿ってきた痕跡は、注意深く見ているとまだそこかしこに散

見られる。要職に就いている人々はベトナム戦争の功績者が多く、南部出身者は出世が難しい。フエの遺跡群は木造を主構造とするものが多いが、厳しい気候条件と歴史のために、崩壊が進むままに放置されているもの、一時的な手当しか施されていないものも多い。なかでも象徴的なのは、王宮内の中心建物である勤政殿（ディエン・カン・チャン）である。現在、勤政殿は基壇と屏壁の一部しか残っていない。あとは広大な草地が広がっているだけである。19世紀ベトナムを象徴する勤政殿を復元したいというのは、平和を取り戻して24年、ようやく生活にゆとりが生まれてきたベトナムの悲願といってもいいだろう。私が今回参加した早稲田大学建築史研究室のヴェトナム調査班も、勤政殿復元のための基礎研究を主たる目的にしている。

フエでの生活・・・バイク・アオザイ・食事

現在のベトナム人の主たる交通機関はバイクである。HONDAやSUZUKIの100cc～200ccのバイクがそれこそ道に溢れんばかりにひしめきあって10～30km/hくらいで走る。車線の概念はゆるやか（！）で、対向車がなければ道路いっぱい広がって走る。対向車が来るとより小さな車両から順にゆっくりと道を譲る。まるで魚の群がすれ違おうようである。2人乗り3人乗りは当たり前、ファミリーになると運転席の父親と後ろの母親の間に2人3人と子供を乗せて一緒くたになって走る。夫婦は別として、ベトナム人は2人乗りする場合、普通は後ろの人が運転者につかまったりしない。大抵、長く改造されたフラットシートの後にはちょこんと座って手は自分の腿の上などに置く。フエは少々保守的だとしても、男女が一緒にバイクに乗っているだけで街中で評判になるらしい。相手の身体に大きく接触したりしているとそれだけで「できている」証拠のように見られる。

服装にもベトナム人独特の美意識を見ることができる。伝統的な女性の服・アオザイは、いわばチャイナドレスの下半身をゆったりとさせたようなもので、巾広のパンタロンをその下に穿く。パステル調の明るい色が一般的だが、「フエ紫」といわれる実に美しい鮮やかな紫色があって、これもよく見かけた。未婚女性だとパンタロンは白が好まれる。良いアオザイのポイントはどれだけ身体のラインに忠実に仕立ててあるかにかかっている。特に重要なのは、高くきつりと締まったスタンドカラーの首から肩にかけての優雅だがきりりとしたライン、肩から胸にかけてのまるやかなラインである。肌の露出を嫌うかわりに、トルソの美しさを強調する一種のボディコンスーツで、東南アジア地域の女性に独特の優美な身体

のラインを演出するに相応しい。もっともこの体型を保つために、ベトナムの若い女性たちはかなりの努力をしているようだ。

また、ベトナムは美味しい料理が多いことでも有名である。「フォー」といわれる麺の本場はハノイだが、フエ名物の「バン・クオン・ティット・ヌーン」といわれる生春巻に似た料理もいい。炭焼の豚肉と香草を米粉のふりつとした皮で包んで、ヌックマンという甘酸っぱく辛いようなタレにつけて、生ニンニクやトウガラシを齧りながら食べる。コップにウイスキーのシングルからダブル分くらいのコンデンス・ミルク（！）と氷を入れ、そのうえにゆっくりとドリップした濃厚なエスプレッソをそそぐ「カフェ・スア・ダー」は、1ヶ月弱のベトナム滞在中ももっともお世話になった飲物である。そのまま啜ってもいいし、かき混ぜて飲んでもいい。極端に甘くて同時に苦い。時間がゆっくりと流れた後は氷が溶けてまるやかな味になる。なんだかベトナムそのものみたいでもある。今は雨季。再びこのコーヒーを飲めるのは来年になる。

DOCOMOMO の活動をご存じですか？

近代建築の評価や保存を提唱する DOCOMOMO の活動をご存じですか？ この活動は日本ではまだ始まったばかりですが、2000年9月には DOCOMOMO の国際会議がブラジルで行われます。今回から3回シリーズで DOCOMOMO を紹介致します。（中村陽子）

◆近代建築の評価や保存を提唱する DOCOMOMO の活動

DOCOMOMO JAPAN WORKING GROUP

建築家 渡辺研司

DOCOMOMO は、The Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement（近代運動にかかわる建物・環境形成の記録調査および保存のための組織）を意味します。DOCOMOMO は、モダン・ムーブメント（近代運動、あるいは近代主義建築）の歴史的文化的重要性を訴えるために、アイントハーゲン工科大学のフベルト＝ヤン・ヘンケット教授の提唱をきっかけに、1989年に設立された国際組織です。

現在、本部はオランダ（デルフト工科大学内）にあり、ヨーロッパを中心に、約40カ国に支部があります。日本もその一つです。ここにいうモダン・ムーブメントは、18、19世紀に端を発する合理主義的・社会改革的な思想や技術革新をベースに、1920年代、30年代に西ヨーロッパで明確な形をとり、40年代から世界中でつくられはじめた建築（環境形成法）で、20世紀の建築・都市計画における主要な潮流のひとつですが、身の回りにたくさん存在していたためか、その歴史的文化的価値を将来に伝えることについては、あまり配慮されてきませんでした。DOCOMOMO は、そのモダン・ムーブメントの成果も20世紀の重要な文化遺産であることを認識し、その歴史を研究するとともに、その歴史的・文化的価値を世界に啓蒙すること、そして、その保存のために強調して努力することをめざしています。

その活動をより具体的に紹介すると、以下の通りです。

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町2-6-5
麹町E・C・Kビル (株)生活構造研究所内
TEL03-5275-7861 FAX03-5275-7866
メールアドレス uifa@magical3.egg.or.jp

- 1) 20世紀の建築と都市環境に関する学術情報と、それらの資料の保存に関する技術的な問題についての情報交換
- 2) 20世紀の建築と都市環境の文化的重要性を啓蒙し、その保存を訴えること
- 3) 20世紀の建築と都市環境の好例をリストアップする

DOCOMOMOは、1990年から2年に1回総会を開いています。来年の2000年がその年にあたり、ブラジリアで総会が開かれます。そのときに、加盟各国に現存するモダン・ムーブメントの好例20件ずつのリストを集めて、20世紀の建築・都市計画の成果を象徴するものとして、出版物をつくることになっており、現在、すでにその編集作業がはじまっています。

また、昨年組織された DOCOMOMO JAPAN WORKING GROUPは、来春、鎌倉の近代美術館において(これも20件のリストの一つの建築です)、日本における20件の近代建築についての現状の写真と原図、模型を中心とした展覧会を開催する予定です。普段何気なく見ている近代建築が、どのような歴史をたどり、いかに建築家がそれに情熱を注いできたのかを、一般人にわかっていたかくことを展覧会開催の目的にしています。同時に、近代建築の保存に関するシンポジウムを予定していますので、ぜひUIFAの会員の方々にも参加していただきたく思います。

DOCOMOMOは、厳密な原則をひとしく適用するものではありません。各国の個別の状況を認めた上で、モダン・ムーブメントの歴史的文化的価値や成果について、できるだけ情報を開示するとともに、国際的なネットワークを形成しながら、21世紀に伝えていくことをめざしています。DOCOMOMOのネットワークをうまく利用しながら、20世紀の文化遺産としてもう一度近代建築の存在を考えましょう。これから2回にわたって DOCOMOMO JAPAN WORKING GROUPのメンバーである、東京都立大学の中原まりさんとフランスに留学中のバリ、ソルボンヌ大学の山名善之さんに図面保存とフランスでの保存の動きについて報告してもらおう予定です。

■ちよつとお知らせ

ナディアさんコンペに優勝

UIFA'98にブルガリアから参加され、我が家にホームステイされたナディアさんよりメールをいただきました。ナディアさんが一緒にいらしたカティアさんと組み、ドブリッチにある古い映画館再生のコンペに優勝し、さらに次のコンペにも挑戦されているとのこと。来年5月に開催されるINTERARCH2000という国際建築トリエンナーレにあわせて来たらと誘われましたので、私はブルガリア行きを予定しています。(竹田恭子)

■広報だより

ニュースレター編集会議のなかから生まれたワークショップ、喜多方の煉瓦蔵見学会の成功。そして間もなく行われる名古屋の「風の道」見学会。次号で報告予定の10月の海外交流の会。より多くの情報と企画を掲載することがニュースレターのつとめとばかりに、月1回の編集会議では活発な議論が繰り広げら

■ちよつと一言

ユニバーサル・デザインを考える
「ブリーツ・ブリーズ」

すてき・安い・便利・着やすい、イッセイ・ミヤケが'90年代初め世に送りだした、ユニバーサルデザイン衣装。服飾評論家・深井見子の私のおすすめグッズが話題を呼んだ一だれにでも使いやすいモノ、やさしい生活環境—ユニバーサルデザイン展を見学。新宿ハ・クワ・ル・ソ・デザインセンター O Z O N E, 8/19~10/5、1010人の学識者が提案する“私の考える、私のおすすめユニバーサルデザイン”、9人の建築家が設計したユニバーサルデザイン住宅のパネル展示を中心に、2F Lにわたり9つのテーマ別ゾーンで展開された。

「具体的にはどんなことを考えていけばいいか」「誰もが利用しやすい空間・製品はなにか」を紹介しながら、すべての人のこれからの豊かな暮らしに向けて、ユニバーサルデザインの方向性をみんなと一緒に考えて行きたい、とする今回の催しの意図。展示の受け止め方も見る人それぞれ、「答えはこれから、貴方も考えて下さい」と言われた気分のユニバーサルデザイン展。住まいづくりの情報ゾーンの多くの見学者に象徴されるように、ユニバーサルデザインはその緒についたばかり。何をどのように使い、組み合わせ、人にやさしいユニバーサルデザインを実現するのか、形には表れない人の生き様としてのユニバーサルデザインについてはどう考えるのか。

作る人・使う人、必要とする場面それぞれで、ユニバーサルデザインに求めるものが変化する中で「What Please?」ユニバーサルデザイン追求の道のりは、果てしなく、どこまでも続くように思われた。(飯島静江)

■役員会の報告

第6回役員会('99年9月20日)役員6名出席

- 報告
- 1 千代田区共催事業申請不採用の報告
 - 2 喜多方ツアーについて
 - 3 第19回海外交流の会「子供と環境フォーラム」
コーディネーター 小澤紀美子さん、お話し 長島サチ子さん
パネリスト (住)リス、岩村マサケさん(トイ)
 - 4 第20回海外交流の会「F.L.ライトの建築見学」
実施は来年度とし、詳細は後日、お知らせする。
 - 5 この指とまれ「藤前干潟」の見学について
(吉田洋子)

れる。今後は災害関連、ユニバーサル・デザイン、女性と建築をテーマに、少しずつでも続けることから、UIFAニュースレターの独自性をとということで、会員の方の声お待ちしています。(編集長: 田中厚子、編集担当: 飯島静江、渡辺喜代美、中村陽子、井手幸子、大高真紀子、須永淑子)